

中川運河再生に向けた取り組み～中川運河再生プラットフォーム～

(1) 中川運河再生計画の策定

中川運河は、名古屋港と都心を結ぶ水運による物流の軸として、昭和の初めから名古屋の経済・産業の発展を支えてきました。昭和40年代以降になると貨物の輸送形態が船からトラックへと変わり、運河を通航する船舶隻数が徐々に減少し、昭和43年には松重閘門の使用が停止されました。現在では、1日数隻の小型タンカーが往来するにとどまり、平成28年度の取扱貨物量は約65,000トンで、最盛期の昭和39年度の1.6%にまで減少しています。また、平成28年度の通航船舶隻数は、入出航あわせて約1,000隻と、昭和39年度の1.3%にまで減少し、物流運河としての役割は小さくなっています。

一方で、中川口の広大な水域では、名古屋レガッタなど市民スポーツの場としての活用が進み、小栗橋付近の水辺や倉庫を活用した市民団体による芸術的なイベントが開催されるなど、中川運河を舞台とした市民活動が盛んになりました。

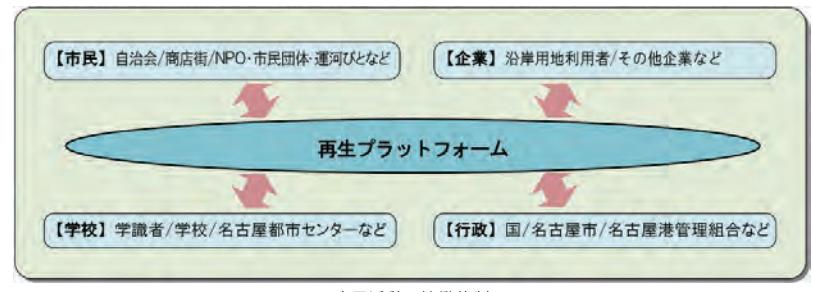
このような背景を踏まえ、中川運河の歴史を尊重しつつ、都心と名古屋港を結ぶ広大な水辺に新たな価値や果たすべき役割を見出した、「中川運河再生計画」が平成24年10月に策定されました。

(2) 中川運河再生プラットフォームとデザインシャレットによる取り組み

市民・企業等による中川運河再生に向けた活動を定着させるためには、参加者同士が直接交流し、運河に対する思いを共有することが重要になります。そこで、名古屋都市センターは、中川運河再生計画に基づき、運河の再生に関わる市民・企業・学校・行政等の多様な主体が情報発信・情報共有し、意見交換できる場として、「中川運河再生プラットフォーム」を設置しています。

プラットフォームでは、中川運河に関する様々な取組について共有することを目指していますが、その中で船だまり周辺の将来的なデザインなどについて議論をしてきました。手法としてはデザインシャレットを行っていますが、その内容が親水公園「キャナルパークささしま」の事業に組み込まれました。

デザインシャレットとは、アーバンデザインやまちづくりの手法の一つで専門家が短期間に協同してデザインを行うものであり、中川運河におけるデザインシャレットにおいても学識者や専門家、関係企業、行政関係者らによって行われております。



市民活動の協働体制

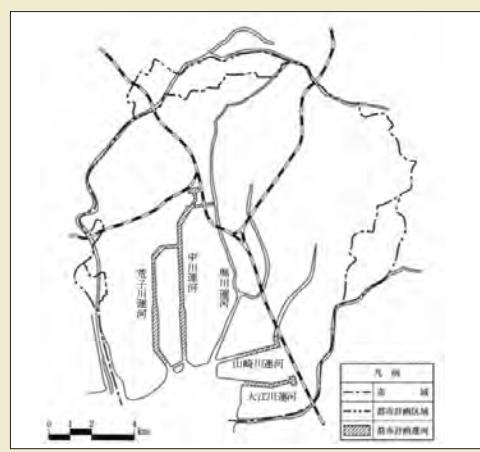


みなと周辺エリア風景生成イメージ
にぎわいゾーン風景生成イメージ

中川運河の歴史

明治22年の市制施行当時の名古屋市は人口が15万7千人でしたが、昭和9年には100万人を突破し、これと同じくして名古屋港の内外貿易額や工業生産額も著しい増加をみました。

当時、工業都市をめざしていた名古屋市でしたが、海陸交通の要衝となる名古屋港の背後の輸送機能は脆弱でした。堀川、新堀川などの既設運河がありましたが、名古屋経済圏を支える物流運河としてはいずれも規模が小さく、潮の干満の影響による「潮待ち」のために輸送に時間も要したことから、必ずしも十分ではありませんでした。そこで名古屋港と旧国鉄を篠島の地でつなぐ中川運河が、荒子川運河、山崎川運河、大江川運河、堀川と合わせて、名古屋の5大運河として大正13年に都市計画決定されました。



都市計画運河網図 (大正13年当初決定)

(3) 魅力ある水辺空間の形成と交流・創造活動の促進

①沿岸用地への憩い・にぎわい施設の誘導

中川運河再生計画における新たな土地利用の展開を図るにあたり、にぎわい施設等の誘導においては、中川運河沿岸用地が公共用地であることに鑑み、公平性の確保とともに魅力ある運河景観の創出のため、構築物における周辺施設との調和や緑化の推進も必要となることから、名古屋港管理組合は、「中川運河再生計画に基づく沿岸用地の土地貸付けに関するガイドライン」を平成27年3月に定め運用を開始しています。

民間事業者の優れたアイデアやノウハウを有効活用し、運河の沿岸用地に港湾関係者のみならず、県民・市民の方々が利用できる商業施設や文化・芸術活動に資する施設等を誘致することにより、魅力ある水辺空間を創出し、中川運河のにぎわいを図ることを目的に、事業提案募集を行った結果、平成28年に「喫茶店」、「バッティングセンター」がオープンするとともに、平成29年に「カフェレストラン・デリカテッセン」、「調理器具販売店・自社製品ギャラリー」の事業予定者も決定し、中川運河の魅力向上に寄与しています。

②大規模再開発と水上交通の活性化

平成29年10月にささしまライブ24地区のまちびらきイベント「GLOBALDAYS 2017」が開催され、来場者約10万人といへんな盛り上がりをみせ、親水公園の愛称「キャナルパークささしま」の発表やクルーズ名古屋の出発式などがとり行われました。

「クルーズ名古屋」は、中川運河の再生とにぎわい創出を図るため、水上交通定期運航に向けた試験運航の愛称であり、同運航の実施に合わせ、水上交通の利用実績等を把握することで、将来の民間企業による自主運航につなげていくことを目的として、ささしまライブからガーデンふ頭・金城ふ頭までをつないでいます。

③中川運河再生文化芸術活動助成事業

愛称を「中川運河助成ARToC10（アートックテン）」というこの助成では、中川運河を舞台とする市民交流や創造活動が継続的に行われるよう支援するため、中川運河にぎわいゾーンの魅力向上につながるアートへの助成を行っています。この助成は、中川運河再生計画の趣旨に賛同されたリンナイ株式会社からの寄付を活用し、名古屋都市センターが実施しています。



①事業提案募集「喫茶店」



②水上交通運航状況



③ARToC10実施状況

今後も名古屋都市センターでは、中川運河再生を促進することで、名古屋市の魅力向上・発展の一助となるように、調査研究を進めるとともに運河再生に向けた活動に取り組んでいきます。

中川運河は、昭和5年に幹線及び北支線が完成し、その当時、「東洋一の大運河」と呼ばれ、昭和7年に全通しました。中川運河の最大の利点は、その規模もさることながら、船の進行方向と逆の潮流を避ける「潮待ち」により輸送に時間を要する堀川と違って、閘門式のために潮位の影響を受けることなく輸送が可能であったという点です。

名古屋港管理組合が設立された昭和26年当時の主な出入貨物品は、入貨が米穀類、石炭、鉄鉱石、土石（砂利・砂・碎石・煉瓦等）、金属、砂糖、木材、油類、薬品、セメント、塩など、出貨が陶磁器、金属、鉄鉱石、土石、機械類などであり、その数量は年々急速に増加しました。昭和38年には、激増する出入船舶の待船緩和対策として、中川口に第二閘門が建設され、昭和39年には7万5千隻を超える船が往来し、出入貨物量は400万トン以上となり、名古屋港の発展とともに名古屋の経済成長に大きく貢献してきました。

